第7回東京海洋大学明治丸海事ミュージアム
フォト・絵画コンテスト

【フォト部門】

＜グランプリ＞

水たまりポンド / 木村拓真さん

審査員の先生による、応募作品全体にかかる講評

明治丸の全体を捉えたり、前景を取り入れたり、敷地内の史跡にも目を向けたりと、様々な切り口で写真を楽しんでいる様子が伝わってきました。写真において、何を見つけ、何を見せたいかが非常に重要です。被写体だけでなく、その周りもよく観察して撮影することで、より豊かな作品になると感じます。しっかりと観察してください。また、グランプリを受賞した木村さんの作品のように、「水たまりを海として捉える」という想像力に基づく世界観も、写真表現の楽しさの一つです。明治丸の歴史や背景にも目を向けて写真を撮影することは、さらに深みを増すアプローチだと思います。

【一般絵画部門】

＜グランプリ＞

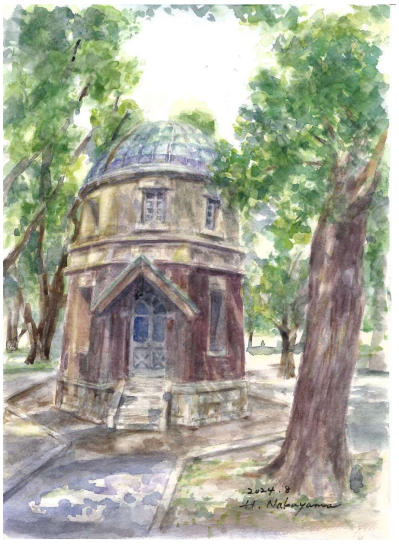
アンカーの塔 /中山和巳さん

＜準グランプリ＞

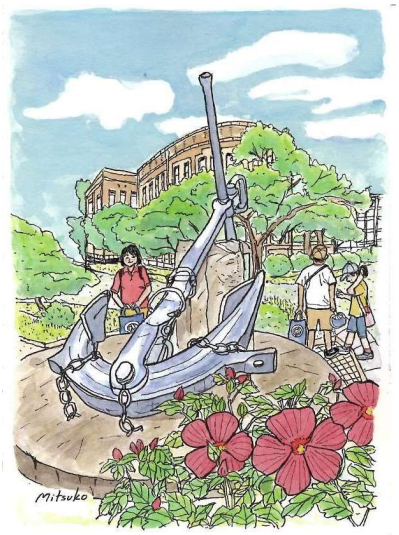
越中島に春が来た / 森田浩司さん

＜佳作＞　※50音順

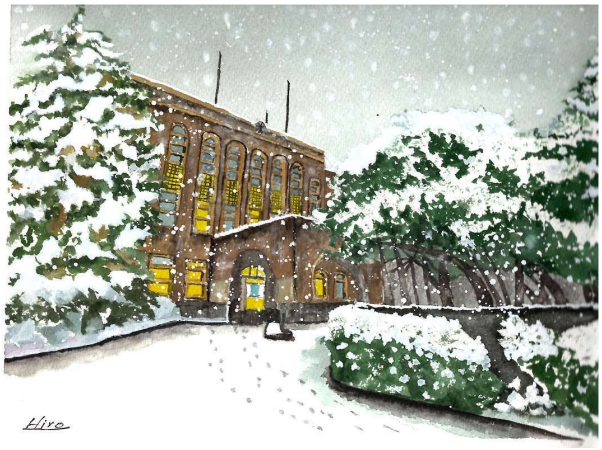
第一観測所 / 中山治美さん



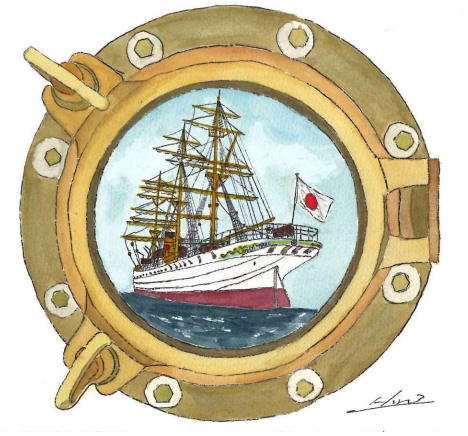
海の日2024 / 羽藤光子さん



雪の一号館 / 森田浩司さん



練習帆船明治丸 / 森田浩司さん



審査員の先生による、応募作品全体にかかる講評

難しい審査でした。明治丸と大学の見せ場を巧みに切り取っていただいた作品揃いで、画風にもそれぞれの描き手ののびやかな個性が光り、大変楽しく拝見させていただきました。絵画を通して「海の日」や明治丸を顕彰する当コンテストに誠にふさわしい、素晴らしい作品をありがとうございました。

【こども絵画部門】

＜グランプリ＞

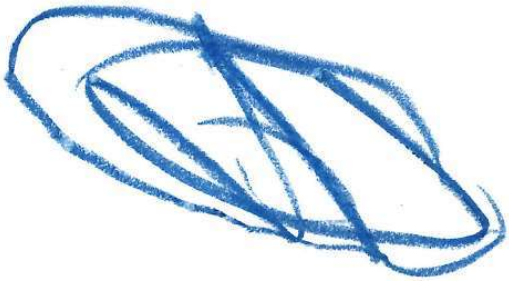
すすめ 明治丸！ / 中野陸久さん

＜準グランプリ＞

明治丸と猫 / 荒井開智さん

＜明治丸海事ミュージアム館長特別賞＞

船（ふね）/ 由利一華さん



＜佳作＞

明治丸のお気に入りのマスト / ペンネーム HIROさん

審査員の先生による、応募作品全体にかかる講評

どの作品にも明治丸への憧憬のこころがあらわれていて感心しました。大きな船を描くという大テーマにチャレンジしてくださったお子さんたちがご家族とどのような会話をかわしたのかも教えていただきたい、そんなふうに思う、素敵な応募作品ばかりでした。

審査員のご紹介

【フォト部門】
写真家　佐藤　尚（さとうたかし）先生

福井県生まれ、少年期を南米・ペルーで過ごす。
1984年東京写真専門学校卒業後、山岳写真家・風見武秀氏に師事。
1990年にフリーとなる。

1963年福井県生まれ、少年期を南米・ペルーで過ごす。
1984年東京写真専門学校卒業後、山岳写真家・風見武秀氏に師事。
1990年にフリーとなる。

30年以上にわたり、全国47都道府県を車中泊しながら撮影の旅を続けている写真家。各地の農村や自然を主なテーマとし、新潟県魚沼と埼玉県見沼田んぼをライフワークとして取材を続けている。東日本大震災を機に、地域の友人作りを目的とした写真ワークショップ「里ほっと」を主宰。
多くの写真展を行うほか、写真集として「こころの故郷－魚沼の風景を撮る」（恒文社）、「47 サトタビ」（風景写真出版）を、写文集に、「japan」（まむかいブックスギャラリー）がある。

【一般絵画、子ども絵画部門】
画家・挿画家　中村麻美（なかむらまみ）先生

三重県生まれ
津田塾大学学芸学部国際関係学科卒。
大学在学中、深層心理学をメソッドに日本人の精神性を研究、また日本画塾で（田中峰雪氏に師事）作画の基礎を学ぶ。

英語個人教授業、NHKBSニュースキャスター、絵本翻訳業を経て日本の心を伝えるメディアとして絵画を志す。
書籍、雑誌、新聞、テレビ番組等で歴史物、武人画、創業者等の挿画を手がけ、近年は歴史上の人物の本画作品制作にも新境地を開く。

代表作（公財）日本武道館発行月刊『武道』表紙絵「伝えたい日本のこころ」シリーズ（企画ならびに絵と文2008～）では、語り継がれるべき日本人のよい行い、精神伝統を伝える物語を描き続ける。